

Title	居住環境の都鄙性と対人関係の様態：資源獲得方略としての友人関係の分析
Author	宮崎 弦太 / 金児 暁嗣
Citation	都市文化研究. 9 巻, p.2-19.
Issue Date	2007-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科：都市文化研究センター
Description	

Placed on: 大阪市立大学

居住環境の都鄙性と対人関係の様態

—— 資源獲得方略としての友人関係の分析 ——¹⁾

宮崎 弦太, 金児 暁嗣

要 旨

本研究の目的は、対人関係の様態の都鄙差をもたらす個人の心理的背景、およびその帰結を検討することであった。本研究では、都市においては多くの人物と友人関係を構築することが、村落においては少数の親友との強固なコミットメント関係を維持することが、他者が提供する資源を獲得するうえで適応的であると考えた。関西圏に居住する2700人を対象とする質問紙調査を行ったところ、予測と一貫し、都市に居住する人についてのみ、人間関係満足度は友人数によって規定されることが明らかとなった。加えて、村落と比較して都市に居住する人々は、親友と共有する社会的役割の数が少なく、そのため、相手との関係における社会的拒絶への感受性は弱いという結果も得られた。以上の結果は、対人関係の様態の都鄙差は、それぞれの環境における資源獲得方略の違いから生じていることを示唆している。

キーワード：都鄙差, 対人関係の様態, 資源獲得方略, 人間関係満足度, 拒絶への感受性

(2006年10月11日論文受理, 2006年12月1日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

問 題

我々は常に他者との関係性の中で生活している。そして、他者との関係はそれ自体で独立に存在するわけではなく、それを取り巻く社会構造の影響を常に受けている (Kelley, Holmes, Kerr, Reis, Rusbult, & Van Lange, 2003)。そのような社会構造の中には、居住環境の都鄙性が含まれる。

都市または村落という環境で生活することが、個人が他者と営む関係の様態に及ぼす影響については、都市社会学を中心に様々な知見が集積されている (e.g., Fischer, 1982)。しかしながら、そのような関係の様態の相違をもたらす個人の心理的背景、およびその帰結に関して

は、十分に検討が行われているとはいいがたい (渡部・金児, 2004)。そこで本研究では、居住環境の都鄙性が他者との関係の様態に及ぼす影響、それが個人の心理過程にもたらす帰結を検討する。

居住環境の都鄙性と対人関係の様態

都市という社会的環境は、提供される施設やサービスの多様性、また整備された交通網などを通して、多くの、そして多様な人々を引きつける。そのため、村落と比較して都市では、そこに居住する人口数は多く、人口密度も高くなる (Fischer, 1976)。このような環境の性質の相違は、それぞれの環境において個人が営む他者との関係の様態に様々な影響を及ぼす (e.g.,

Fischer, 1982; 針原, 2003; 針原・辻, 2003; 大谷, 1995a, b)。

第1に、居住環境の都鄙性により他者と共有される社会的役割 (e.g., 仕事仲間, 近所の人) の数が異なることが知られている (Fischer, 1982; 大谷, 1995a, b)。具体的には、都市においては、人口数の多さや人口密度の高さに伴い、個人にとってある役割を果たす人間の代替選択肢が多く存在する (Fischer, 1982)。そのため他者との関係も、異なる役割に応じた異なる人々との選択的な関係、すなわち単一送信型 (uniplex) の関係となりやすい (大谷, 1995a)。一方、村落においては、そこに居住する人口数は少なく、人口密度も低い (Fischer, 1976)。そのため、ある役割を果たす人間の代替選択肢は相対的に少なくなり (Fischer, 1982)、他者との関係は特定の人物が個人にとって様々な役割を果たすような関係、すなわち多重送信型 (multiplex) の関係となりやすい (大谷, 1995a)。この点に関して、Fischer (1982) は、村落と比較して都市では、個人が他者と営む関係の中で、社会的役割を共有しない純粋な友人 (just friend) の割合がより多くなることを明らかにしている。さらに、都市に居住する人は、友人と共有する役割の数が実際に少ないだけでなく (大谷, 1995b)、友人づきあいにおいて単一送信的な関係を志向していることも明らかになっている (大谷, 1995a)。

第2に、居住環境の都鄙性によって、個人の有する対人ネットワークにおいて、ネットワーク成員同士が相互に結合している程度 (i.e., ネットワーク密度) に差が認められている。具体的には、村落と比較して都市では、対人ネットワークの密度が低い (Fischer, 1982; 針原, 2003)。このようなネットワーク構造の相違は、都市において他者との社会的役割の共有数は少なく、村落において共有数は多いという違いを反映していると考えられる (Fischer, 1982)。なぜなら、他者と単一送信的な関係を築くということは、個人にとってある役割を果たす他者と相互作用する文脈が、別の役割を果たす他の構成員と共有されにくくなることを意味する (大谷, 1995a)。そのため、個人の持つネットワークの成員同士が相互に知り合いであるとい

う可能性は低下するからである。

そして興味深いことに、ネットワーク密度の相違は異なる対人行動傾向を生み出すことが明らかになっている。具体的には、村落と比較して都市では、自己高揚的自己呈示 (self-enhancement self-presentation) が行われやすい (針原, 2003; 針原・辻, 2002, 2003)。自己の肯定的な側面を表明することは、他者にとって自己が魅力的な関係相手であることを伝え、新たな関係の構築を容易にする (針原・辻, 2002)。しかし、自己高揚的自己呈示はそれが失敗したとき、相手との関係が悪化するというリスクを有している。特に、高密度のネットワークが構築されている村落においては、自己呈示を行った相手との関係が悪化するだけでなく、関係相手を媒介して別の人物に対してもその影響が伝播する恐れがある (Fiske & Yamamoto, 2005; 針原・辻, 2005)。さらに、他の人間関係を選択する機会が少ないために、失敗のコストはより大きくなる (針原・辻, 2002)。したがって、自己の否定的な側面をあらかじめ表明しておくこと、すなわち自己卑下的自己呈示 (self-effacement self-presentation) を行うことにより、関係相手からの評判が低下する可能性を軽減させようとする (針原・辻, 2003)。一方、低密度のネットワークが構築されている都市においては、自己高揚的自己呈示が失敗したときの影響は当該他者との関係以上には広がりにくい。さらに、人間関係の選択可能性が高く、失敗のコストはより小さい (針原・辻, 2002)。そのため、自己の肯定的な側面を表明することで、新たな関係構築の可能性を増加させようとする (針原・辻, 2003)。このようなネットワーク構造に伴う自己呈示方略の違いから、都市においては、新たな関係を構築しようとする傾向、村落においては、既存の関係を維持しようとする傾向を読み取ることができる。

以上に挙げた単一送信的な関係／多重送信的な関係への志向性、および新たな関係構築／既存の関係維持への志向性という2つの側面は、相互に関連している。例えば、単一送信的な関係を志向する場合、特定の他者との関係を維持するだけでは、必要な専門的援助を得ることはできない。逆に、多重送信的な関係を志向する

場合、時間などの個人の持つ資源の制約により、既存の関係と同様のものを新たに構築することは困難である。そこで2つの側面を総合すると、都市と村落における対人関係の様態について、それぞれ次のような特徴が浮かび上がる。すなわち、都市に居住する人は、専門的な役割を果たす多くの他者との関係を構築しようとし、一方、村落に居住する人は、複数の役割を果たす少数の他者との関係を維持しようとしている。言い換えると、都市に居住する人は「広く浅い」関係への志向性を持ち、村落に居住する人は「狭く深い」関係への志向性を持っているといえる(e.g., 大谷, 1995b)²⁾。

対人関係の様態の都鄙差を生み出す要因： 適応課題への解決方略に注目して

では、上述のような対人関係の志向性の都鄙差は、どのような要因によって生まれているのであろうか。人口数という物理的な特性が影響していることは確かである。例えば、居住環境における人口数が少なければ、他者と「広く浅い」関係を構築することは困難である。しかし、このような特性のみでは、対人関係の志向性の都鄙差を十分に説明することはできない。なぜなら、居住環境における人口数が多い場合に、なぜ「狭く深い」関係ではなく、「広く浅い」関係を志向するのかななどの疑問が解決されないからである。そこで本研究では、それぞれの社会的環境における適応課題という観点(亀田・村田, 2000; 山岸, 1998)から、その課題への解決方略の違いが対人関係の志向性の都鄙差を生み出すという過程を検討する。

人間は他者との安定した肯定的な関係を構築・維持しようとする欲求、すなわち所属欲求(need to belong)を持っている(Maslow, 1943)。そして、このような欲求を持つようになったのは、他者との関係が、食料、子孫、物質的・心理的援助などの自己のみでは得られない資源を提供するという適応的価値を有していたためであるとされる(Baumeister & Leary, 1995)。つまり、他者との関係を構築・維持するという行為は、資源の獲得という適応課題への解決方略として位置づけることができる。ただし、資源を獲得するための方法は2つある。

1つは、すでに資源を提供してくれている他者との関係を維持するという方法、もう1つは、新たに資源を提供してくれる別の他者との関係を構築するという方法である。そして、居住環境の都鄙性は、他者が提供する資源の獲得という適応課題を解決するための方略に影響を及ぼすと考えられる。

具体的には、都市という社会的環境において、ある役割を果たしている人物の代替選択肢は相対的に多い(Fischer, 1982)。加えて、そのような代替選択肢の中には、現在の関係相手よりも自己にとって利得の高い資源を提供できる人物も含まれる。その結果、新規の関係を構築することによって得られる利得の期待値が相対的に高くなる(山岸, 1998)。このような都市的環境の特徴は、特定の他者とのコミットメント関係を維持し続けるよりも、より利得の高い資源を提供する他者との新たな関係を構築するという方略を誘引すると考えられる。一方、村落という社会的環境では、ある役割関係にある他者の代替選択肢は相対的に少なく(Fischer, 1982)、そのため、前者の方法で適応課題を解決しようとするだろう。そして、このような解決方略の相違が、都市において専門的な役割を果たす多くの他者との関係を構築しようとする傾向、村落において複数の役割を果たす他者との関係を維持しようとする傾向を生み出すと考えられる。しかし両者の関係を直接検討した研究は、管見ではまだ行われていない。

そこで本研究は、適応課題への解決方略の相違と対人関係の志向性の都鄙差との関係を検討することを1つ目の目的とする。そのために、個人が営む友人関係に注目し、人間関係の満足度を規定する友人関係の性質が都市と村落で異なることを明らかにする。本研究で友人との関係を取り上げるのは、友人は我々に様々な資源を提供する源であり、また、友人関係は一般に個人の自発的な選択によって構築・維持・解消されるため、都市と村落における対人関係の志向性をより反映できると考えたからである。

上述のように、対人関係の志向性の都鄙差が適応課題への異なる解決方略を反映しているのであれば、都市と村落という環境においてそれぞれの志向性と合致した友人関係を営んで

いる人は、対人関係における自身の適応度をより高く認知し、そのため、人間関係の満足度も高くなると考えられる。つまり、都市では、多くの他者との関係構築が実現していることの指標である友人の数が、村落では、強いコミットメント関係にある特定の親友との関係維持が実現していることの指標である相手との心理的一体感が、それぞれ人間関係満足度を規定すると予測される。心理的一体感は、関係相手の資源 (resource)、視点 (perspective)、そしてアイデンティティ (identity) を自己に取り込むことにより、自己と他者との認知的表象が重なり合うことを意味する (Aron, Aron, & Somollan, 1992)。そのため、強い心理的一体感が抱かれるということは、自己と関係相手が相互に切り離し得ないことを表しており、相手との強固な関係が維持されていることの指標になると考えた。

対人関係の様態の都鄙差が生み出す心理的な帰結：拒絶への感受性への影響

ところで、我々が他者と関係を構築・維持する過程は常にスムーズに進行するわけではない。特に、相手から拒絶されるという事態に陥ると、これから築こうとしていた関係、あるいはこれまで維持してきた関係が失われる危険性が生じる。そして、他者からの拒絶は、相手が提供する資源の獲得の失敗を意味し、個人に様々なネガティブな帰結をもたらす (Baumeister & Leary, 1995)。そのため、我々は他者との関係を構築・維持しようとすると同時に、他者からの拒絶の手がかりを敏感に検知し、それを回避しようとする心性を有している (e.g., Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995)。

これまでに述べてきた対人関係の様態の都鄙差は、他者との関係における拒絶への反応傾向に影響を及ぼす可能性を内包している。特に、それぞれの環境における対人関係の志向性を考えると、親友という特定の重要他者との関係において、相手からの拒絶の手がかりを敏感に検知する程度、すなわち拒絶への感受性 (rejection sensitivity) に差が認められると予測される。

まず、都市と村落では、強いコミットメン

ト関係にある親友との関係において、相手と共有する社会的役割の数が異なる (Fischer, 1982)。そして、社会的役割の共有数は、相手の代替可能性 (alternative possibility) に影響することを通して、関係相手への依存性 (dependency) に影響を及ぼす (Thibaut & Kelley, 1959)。具体的には、社会的役割の共有数が増すほど、それらの全ての役割を果たす他者を他に見出す可能性は低くなり、自己が今までどおりの安定した幸福な生活 (welfare) を営む上で、相手との関係への依存性が増す (Berscheid & Ammazalorso, 2001)。換言すると、親友から拒絶されてその関係を失った場合の損失はより大きくなる。次に、ある手がかり (e.g., 拒絶) を見逃すことのコストが大きい場合、その手がかりを過大に検出するような認知バイアスが生まれる (Haselton & Buss, 2000)。そのため、関係相手からの拒絶に伴う損失が極めて大きいとき、その人物との関係における拒絶への感受性は高まると考えられる。両者の関係を示唆する知見も存在する。例えば、相手が別の人物との関係を構築することにより、自分との関係に危機が訪れると検知された場合に生じる嫉妬という感情 (Leary, Koch, & Hechenbleikner, 2001) は、恋人への依存性が高いほど生じやすいことが明らかになっている (White, 1981)。

以上より、居住地域の都鄙性が、親友と共有する社会的役割の数に影響することを通して、その人物との関係における拒絶への感受性に影響を及ぼすという予測が成り立つ。そこで本研究の2つ目の目的として、村落と比較して都市では、親友との社会的役割の共有数は相対的に少なく、そのため、相手との関係における拒絶への感受性は低いという仮説モデルを検証する。

なお、本研究では、対人コミュニケーション過程における拒絶への感受性に注目する。対人コミュニケーションは、他者との良好な関係を構築・維持するための主要な手段である (Dunbar, 1996; Knapp & Vangelisti, 2004)。そのため、他者との関係の状態をモニターしようとする傾向は、コミュニケーション過程において顕著に現れると考えられ、拒絶への感受性

の相違を検討するうえで適した文脈であると考えられる。対人コミュニケーションと拒絶への感受性との関連を検討した研究は少ないが、宮崎(2006b)は、会話中に生じる沈黙(silence)という事象に注目し、同性の人物との関係において拒絶への感受性が高まるほど、その人物との会話中に生じる沈黙自体に対して、落ち着かない、気まずいなどの否定的反応がよりなされるという関係を見出している³⁾。そして、両者の関係は次のように説明されている。まず、対人コミュニケーションにおいて、発話という手段は、霊長類において群れに所属するより多くの成員とのつながりを構築・維持するために、毛づくろい(grooming)の代替手段として生じたとされる(Dunbar, 1996)。沈黙は発話が果たす関係構築・維持機能を阻害するため(Jensen, 1973)、コミュニケーション過程において相手からの拒絶と検知される(宮崎, 2004, 2006a, b)。したがって、拒絶への感受性が高まる状況において、沈黙はより敏感に拒絶の手がかりと検知され、沈黙への否定的な反応が顕現化したと考えられる(宮崎, 2006a, b)。以上の知見に基づき、本研究では、拒絶への感受性を測定するために、関係相手との会話中に生じる沈黙への否定的な反応をその指標として用いることにした。

本研究の目的と予測

要約すると、本研究の目的は次の2つである。第1に、適応課題への解決方略の都鄙差という観点から、人間関係の満足度を高める友人関係の性質が都市と村落では異なることを明らかにする。第2に、それぞれの環境における対人関係の様態の相違に伴って、強いコミットメント関係にある親友との関係において拒絶への感受性に都鄙差が生じることを明らかにする。この目的のため、本研究では以下の2つの予測を検証する。

予測1 都市においては、より多くの人物と友人関係を営んでいることが、村落においては、親友により強い心理的一体感を抱いていることが、人間関係満足度を高めるだろう。

予測2 村落と比較して都市という居住環境において、親友と共有する社会的役割の数

少なく、そのため、親友との間に生じる沈黙への否定的な反応は弱いであろう。ただし、都市と村落に居住する人々の個人的属性が、拒絶への感受性の都鄙差を生み出すことは十分考えられる。そこで個人の内的属性として、先行研究で都鄙差が認められ、かつ拒絶への感受性に影響すると考えられる、特性自尊心(trait self-esteem)と年齢を取り上げ、これらの要因の影響を統制しても、上述の関係が認められるかを検討する。

特性自尊心は拒絶への感受性と負の相関関係にあり(Downey & Feldman, 1996)、また、村落に居住する人と比較して、都市に居住する人は特性自尊心が高いことが明らかになっている(渡部・金児, 2004)。年齢に関しては、加齢やそれに伴う健康状態の変化は移動性や対人接触の制約を生み、新たな他者との関係構築を相対的に困難にする(e.g., Argyle & Henderson, 1985)。そのため、親友からの拒絶に伴う損失はより大きくなり、その結果、拒絶への感受性はより高まると考えられる。そして、村落と比較して都市に居住する人々の年齢は若いことが知られている(Fischer, 1982)。したがって、特性自尊心と年齢という要因からも、村落と比較して都市に居住する人の沈黙への否定的な反応はより弱いことが予測される。

さらに、沈黙への否定的な反応の都鄙差が、単に親友に抱かれる親密性の差異に起因するものではないことを示すため、親友との心理的一体感も統制変数として加えた。この点に関して宮崎(2006b)は、ある人物に対して強い心理的一体感を抱くほど、相手との関係における拒絶への感受性は低くなり、それに伴って、沈黙への否定的な反応が弱まることを明らかにしている。これは、相手に強い一体感を抱くことで所属欲求が満たされ(Leary & Baumeister, 2000)、関係相手からの受容獲得・拒絶回避への誘引が弱まる(Pickett, Gardner, & Knowls, 2004)ためであると説明されている。ただし、社会的役割の共有数と類似し、心理的一体感には、それを強く抱くことによって、相手との関係への依存性が高まるという側面もある。強い一体感を抱いた他者との関係から離れることは、自己に取り込まれた相手の資源、視点、

アイデンティティの多くを喪失することを意味するからである（McLaughlin-Volpe, Aron, Wright, & Lewandowski, 2005）。しかし、Murray, Rose, Bellavia, Holmes, & Kusche (2002) が明らかにしているように、強い心理的一体感は、相手から拒絶されないことを確信することによって初めて抱かれる。したがって、社会的役割の共有数に伴う依存性の場合とは異なり、心理的一体感に伴う依存性の問題は、一体感が抱かれる時点で既に解決されているといえる。

方 法

調査対象地域の選定

都市の対象地域として、大阪市の24の行政区のうち、2002年度に金児暁嗣を中心とする研究グループが行った「関西圏住民の生活様式と価値観の特徴」調査の対象地域であった区（渡部・金児, 2004を参照）、1世帯人数や外国人人口比率に他の区と著しい違いのある区を除いた15区を選出した。対象地域は、都島区、福島区、大正区、天王寺区、西淀川区、東成区、旭区、住吉区、東住吉区、淀川区、鶴見区、住之江区、平野区、北区、中央区である。

村落の対象地域としては、兵庫県、和歌山県、奈良県、京都府の市町村の中から、平成12年度国勢調査の結果に基づき、人口密度が高く、かつランダムサンプリングが可能な程度の人口があり、第1次産業従事者の比較的多い地域を12地域選出した。対象地域は、和歌山県九度山町、広川町、金屋町、川辺町、南部川村、京都府和束町、京北町、京丹後市（旧久美浜町地域）、兵庫県上月町、温泉町、奈良県室生村、山添村である。

調査協力者と手続き

調査は2004年8月に行った。都市部と村落部の選挙人名簿をもとに、2段階層化無作為抽出法により選出した20代～70代の男女2700名（都市部1500名、村落部1200名）を調査対象者とし、郵送法によって調査を行った。返送があった協力者に対しては、謝礼として図書券500円

分を送った。

有効回答率は都市部が30.5%、村落部が40.6%、全体が35.0%であった。協力者数は都市部が458名（男性196名、女性262名）、村落部が487名（男性236名、女性251名）の合計945名（男性432名、女性513名）であった⁴⁾。平均年齢は都市部の男性が50.96歳（ $SD=16.29$ ）、女性が52.98歳（ $SD=16.38$ ）、村落部の男性が56.99歳（ $SD=14.89$ ）、女性が55.15歳（ $SD=15.76$ ）、都市と村落の全体の平均年齢は54.21歳（ $SD=15.94$ ）であった。

測 度⁵⁾

人間関係満足度 人間関係についてどの程度満足しているか（「あなたとあなたの周囲の人間関係について、総じてあなたはどの程度満足されていますか」）を、6件法（1. まったく満足～6. まったく不満）により尋ねた。得点が高いほど、人間関係に対してより満足していることを示すように得点化し、これを人間関係満足度得点とした。

友人数 友人数は、親しく付き合っている友人・知人の数を、1. なし、2. 1人、3. 2～4人、4. 5～7人、5. 8～10人、6. 11～13人、7. それ以上の中から、当てはまる数字を選ぶことで回答してもらった。7を選択した人に関しては、その具体的な数字を記述してもらった。得点化の際には、1が選択された場合は0人、2が選択された場合は1人、3～6が選択された場合はその中央値の人数（e.g., 5の場合は9人）、7が選択された場合はその具体的な数字を友人数とした。なお、以下に述べる測度のうち、社会的役割の共有数、沈黙への反応、そして心理的一体感については、ここで挙げられた友人・知人の中で最も親しく付き合っている同性の友人を思い浮かべてもらった後、それぞれの測度に回答してもらった⁶⁾。

社会的役割の共有数 社会的役割の共有数は、親友との間に、現在友人であるということ以外の役割があるか否かを尋ねることにより測定した。仕事（学校）仲間、仕事・学校以外の集まりのメンバー、近所の人、その他、なし、の中からあてはまるもの全てを選んでもらった（最小0－最大4）。なお、その他を選択した

人については、その具体的な役割を記入してもらった。

沈黙への反応 親友との間に生じる沈黙への反応を測定するため、Hasegawa & Gudykunst (1998) の尺度を参考に、沈黙が拒絶として検知されたときの否定的な反応が測定できるように項目を作成し、10項目で構成される沈黙観尺度を作成した (e.g., その人が沈黙すると、自分との会話に退屈しているのではないかと思う)。それぞれの項目について、5件法 (1. まったくあてはまらない～5. とてもあてはまる) により評定してもらった。

心理的一体感 親友に対して抱かれる心理的一体感を測定するため、Aron et al. (1992) のIOS (Inclusion of Other in the Self) 尺度を修正した、Li (2002) の尺度を用いた。この尺度は、自己と親友が2つの円で図示されているというものであった。そして、円が完全に離れたもの(1) からほぼ重なり合ったもの(7) までの7段階のベン図の中で、2人の関係を最も表すものを選ぶことで評定してもらった。得点が高いほど、親友により強い一体感を抱いていることを示すように得点化し、これを心理的一体感得点とした。

特性自尊心 特性自尊心を測定するため、

Rosenberg (1965) とCoopersmith (1967) を参考に向井・金児・河野・渡部・岸川・堀江・宮崎 (2003) が構成した、10項目からなる自尊心尺度を用いた。それぞれの項目 (e.g., 少なくとも人並みには、価値のある人間である) について、5件法 (1. まったくあてはまらない～5. とてもあてはまる) により評定してもらった。

結 果

尺度構成

沈黙への反応 沈黙観尺度に対して因子分析 ($N=823$, 主因子法, プロマックス回転) を行った結果、固有値の減衰状況 (第1因子が3.91, 第2因子は1.62, 第3因子は0.95) から2因子構造と判断した (表1)。分析の過程で、どちらの因子にも強く負荷しない1項目 (.35未満) と因子の解釈と整合しない1項目の計2項目を除外した。

表1に示されるように、第1因子は、「その人が沈黙すると、自分との会話に退屈しているのではないかと思う」などの5項目で構成されていた。これは、親友との会話中に沈黙が生じ

表1 沈黙観尺度の因子負荷量行列、平均、標準偏差、そして共通性

	I	II	mean	SD	共通性
I 「沈黙への否定的な視点」 $\alpha = .85$					
5. その人が沈黙すると、自分との会話に退屈しているのではないかと思う	.78	-.02	2.38	1.04	.62
3. その人が沈黙していると、何を考えているのか気になる	.75	-.03	2.43	1.12	.58
2. その人と会話しているとき、お互いが黙ってしまうと気まずさを感じる	.74	-.01	2.18	1.10	.56
7. その人とお互い黙ったままでいると落ち着かない	.74	-.03	2.37	1.09	.57
9. その人が会話中に急に黙ると、自分が何か悪いことを言ってしまったのではないかと思う	.67	.08	2.48	1.08	.42
II 「沈黙への受容的な視点」 $\alpha = .72$					
10. 会話中にその人が沈黙しても不安にならない	.05	.77	3.33	1.15	.56
6. その人との会話中に沈黙が生じていても気にならない	.01	.65	3.48	1.20	.42
8. その人との会話中に長い沈黙があっても、無理に話題を見つけようとしな	-.05	.62	3.22	1.11	.41
因子間相関	-.39				
削除項目	4. その人とは言葉を交わさなくても、一緒にいることで心地よさを感じる 1. その人が沈黙していると、何か話しかけようと努める				

たとき、それに対して否定的な反応がなされることを意味しており、「沈黙への否定的な反応」に関する因子と解釈できた。数値が高いほど沈黙に対して否定的な反応をしていることを示すよう、5項目の項目得点の平均値を算出し、これを沈黙への否定的な反応得点とした ($\alpha = .85$)。第2因子は、「会話中にその人が沈黙しても不安にならない」などの3項目で構成されていた。これは沈黙を、親友との会話中に自然に生じるものとして受け入れていることを意味しており、「沈黙への受容的な反応」に関する因子と解釈できた。数値が高いほど沈黙に対して受容的な反応をしていることを示すよう、3項目の項目得点の平均値を算出し、これを沈黙への受容的な反応得点とした ($\alpha = .72$)。ここで、沈黙への否定的な反応は、沈黙が拒絶として検知されたときに生じる反応であり（宮崎, 2004）、そのため、拒絶への感受性を測定する目的により適した測度であると考えた。そこで以下の分析では、沈黙への否定的な反応得点のみを用いた。

特性自尊心 特性自尊心尺度に対して因子分析 ($N=884$, 主因子法) を行った結果、固有値の減衰状況（第1因子が4.20, 第2因子は1.11, 第3因子は0.81）から1因子構造と判断した（表2）。数値が高いほど特性自尊心が高いことを示すよう反転項目の得点を修正した後、10項目の項目得点の平均値を算出し、これを特性自尊心得点とした ($\alpha = .85$)。

各変数の記述統計

まず、本研究で用いた全ての変数の都鄙別の平均値と標準偏差、およびt検定の結果を表3に示した。

表3に示されるように、親友との社会的役割の共有数、親友との間に生じる沈黙への否定的な反応、特性自尊心、そして年齢について都鄙差が認められた。これらは、村落と比較して都市に居住する人は、親友と共有する社会的役割の数はより少なく、親友との間で生じる沈黙への否定的な反応はより弱い。そして、特性自尊心はより高く、年齢はより若いことを示すものであった。

一方、友人数と親友への心理的一体感に都鄙差は認められなかった。これは、対人関係の志向性に関する先行研究の知見（e.g., 大谷, 1995a, b）と整合しないように思われる。この点については考察で再度言及するが、本研究においてより重要なのは、友人数と親友への心理的一体感の都鄙差ではなく、都市と村落という居住環境における、それぞれの変数と人間関係満足度の関係である。

予測1の検証

そこで予測1を検証するため、人間関係満足度を目的変数、友人数と親友への心理的一体感を説明変数とした重回帰分析を都鄙別に行った。なお、重回帰分析に用いた変数間の相関係数（都鄙別）を表4に示した。

表2 自尊心尺度の因子負荷量行列、平均、標準偏差、そして共通性

	I	mean	SD	共通性
I 「自尊心」 $\alpha = .85$				
7. なにかにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	.67	2.14	0.90	.45
6. 少なくとも人並みには、価値のある人間である	-.64	3.59	0.87	.41
2. 自分はまったくだめな人間だと思うことがある	.60	2.31	1.03	.37
10. 周囲の人は私には能力がないと思っている	.60	2.43	0.84	.36
8. 周囲の人にとって、私はなくてはならない存在である	-.60	3.31	0.88	.36
9. 私はいろいろな良い素質を持っている	-.60	3.31	0.84	.35
1. 自分は社会の役に立つ人間である	-.59	3.26	0.87	.35
5. 私は周囲の人に信頼されていない	.59	3.34	0.84	.34
3. 自分には自慢できるところがあまりない	.57	2.73	0.98	.32
4. 私はどのような人の前でも堂々としていられる	-.50	3.06	1.03	.25

都鄙別の重回帰分析を行ったところ、都市では親しく付き合っている友人・知人数のみが有意な正の偏回帰を人間関係満足度に示すことが明らかとなった(表5)。一方、村落では重回帰式が有意でなかったため($F(1,415)=3.50$, $p=.051$)、友人数と親友への心理的一体感が人間関係満足度に及ぼす影響を検証することはできなかった。

村落においては重回帰式が有意ではなく、また都市においてもモデルの説明力は弱かった(調整済み R^2 値=.05)が、都鄙別の重回帰分析の結果は、都市ではより多くの人物と友人・知人関係を営んでいることが、人間関係についての満足度を高めることを示すものであり、予測1は一部支持されたといえる。

表3 各変数の平均値と標準偏差(都鄙別)

		都市	村落	t検定
人間関係満足度得点	Mean (SD) N	4.22 (0.83) 456	4.21 (0.76) 478	$t(932) = 0.36, n.s.$
友人数	Mean (SD) N	5.27 (4.62) 454	5.20 (4.21) 483	$t(935) = 0.26, n.s.$
社会的役割の共有数	Mean (SD) N	1.04 (0.65) 411	1.27 (0.75) 448	$t(857) = -4.83, p < .01$
沈黙への否定的な反応得点	Mean (SD) N	2.24 (0.81) 401	2.45 (0.92) 432	$t(831) = -3.45, p < .01$
特性自尊心得点	Mean (SD) N	3.53 (0.59) 425	3.41 (0.58) 459	$t(882) = 3.11, p < .01$
年齢	Mean (SD) N	52.12 (16.35) 460	56.04 (15.36) 493	$t(951) = -3.83, p < .01$
IOS尺度得点	Mean (SD) N	3.30 (1.42) 408	3.36 (1.45) 440	$t(846) = -0.56, n.s.$

Note: 人間関係満足度の尺度上の中位点は3.5, 沈黙への否定的な反応得点の尺度上の中位点は3, 社会的役割の共有数は最小0-最大4, 特性自尊心得点の尺度上の中位点は3, IOS尺度得点の尺度上の中位点は4。

表4 重回帰分析に用いた変数間の相関係数(都鄙別)

	都市 (N=408)			村落 (N=418)		
	1	2	3	1	2	3
1. 人間関係満足度	1			1		
2. 友人数	.22**	1		-.03	1	
3. 親友への心理的一体感	.10*	.12*	1	.12*	.09*	1

Note: * $p < .05$, ** $p < .01$ 。

表5 人間関係満足度得点を目的変数とした重回帰分析の標準偏回帰係数(都鄙別)

説明変数	都市 (N=408)	村落 (N=418)
友人数	.23**	-.03
親友への心理的一体感	.08	.12*
調整済みR ²	.05**	.01

Note: * $p < .05$, ** $p < .01$ 。

予測2の検証

予測2を検証するため、パス解析（ $N=767$ ）を行ったところ、図1に示すモデルが得られた。適合度指標は、 $\chi^2(5)=9.23$, $p=.16$, $GFI=1.00$, $AGFI=.99$, $CFI=.97$, $RMSEA=.03$ であり、データに対するモデルの当てはまりは良かった。なお、パス解析に用いた変数間の相関係数を表6に示した。

図1に示されるように、居住地域の都鄙性は社会的役割の共有数に有意な負の影響、そして特性自尊心に有意な正の影響を与えていた。また、年齢との有意な負の相関が認められた。これらは、上述のt検定と同様の結果であった。次に、社会的役割の共有数、自尊心、そして年齢が沈黙への否定的な反応に有意な影響を及ぼしていた。具体的には、社会的役割の共有数と年齢が沈黙への否定的な反応に有意な正の影響

を及ぼしていた。そして、特性自尊心が沈黙への否定的な反応に有意な負の影響を及ぼしていた。これらは、親友との社会的役割の共有数が少ないほど、特性自尊心が高いほど、そして年齢が若いほど、親友との間に生じる沈黙への否定的な反応は弱いことを示すものであった。一方、心理的一体感は、居住地域の都鄙性とは独立に、沈黙への否定的な反応に有意な負の影響を及ぼしていた。これは、親友との心理的一体感が強いほど、その人物との間に生じる沈黙への否定的な反応は弱いことを示すものであった。

パス係数の値が全体的に低いという限界を有しているが、以上の結果は、個人の内的属性および親友との心理的一体感の影響を統制しても、村落と比較して都市という居住環境において、親友と共有する社会的役割の数は少なく、

表6 パス解析に用いた変数間の相関係数（ $N=767$ ）

	1	2	3	4	5	6
1. 居住地域の都鄙性	1					
2. 社会的役割の共有数	-.16**	1				
3. 特性自尊心得点	.10**	.06	1			
4. 年齢	-.15**	.18**	.01	1		
5. IOS尺度得点	-.03	.02	.03	.01	1	
6. 沈黙への否定的な反応得点	-.12**	.14**	-.17**	.14**	-.12**	1

Note1: 居住地域の都鄙性は都市が1, 村落が0のダミー変数。2: ** $p<.01$ 。

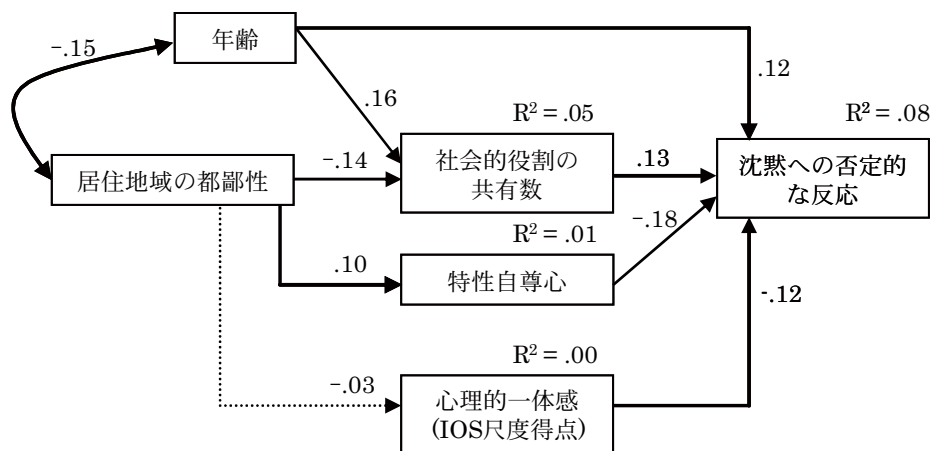


図1 居住地域の都鄙性が沈黙への否定的な反応に及ぼす影響

Note1: 居住地の都鄙性は都市が1, 村落が0のダミー変数。2: 実線は1%水準で有意なパスと共分散, 破線は有意でないパス。3: 数値は標準偏回帰係数。

それに伴って、親友との間に生じる沈黙への否定的な反応は弱いことを示しており、予測2は支持されたといえる。

考 察

本研究の目的は、1) 都市と村落では他者が提供する資源の獲得という適応課題への解決方略は異なり、それに伴って、人間関係満足度を規定する友人関係の性質が異なること、2) 対人関係の様態の都鄙差に伴って、関係相手からの拒絶への反応傾向に差異が生まれることを明らかにすることであった。そのために、都市と村落間の比較調査を行い、2つの予測を検証した。以下では、それぞれの予測について本研究で得られた結果を考察する。

人間関係満足度の規定因の都鄙差

対人関係の様態が都市と村落で異なることは多くの先行研究によって明らかになっており(e.g., Fischer, 1982; 針原, 2003; 大谷, 1995a), それらは、都市における「広く浅い」関係への志向性、村落における「狭く深い」関係への志向性と要約できる(e.g., 大谷, 1995a)。本研究ではこのような志向性が、それぞれの環境において他者が提供する資源を獲得するうえで適応的であるために生じていると考えた(山岸, 1998も参照)。そのため、対人関係における自己の適応度を示す人間関係の満足度は、都市と村落という環境において、それぞれの志向性と合致した対人関係を実現している人においてより高くなると予測した。

本研究で得られた結果は、この予測を一部支持するものであった。すなわち、都市では、多くの他者との関係構築が実現していることの指標である友人の数が、人間関係の満足度を高めることが明らかとなった。都市的環境は、提供される施設やサービスの多様性、また整備された交通網などを通して、より多くの、そして多様な人々を引きつける(Fischer, 1976)。そのため、都市は、新規な関係を構築することによって、既存の関係では得られない資源を獲得できる可能性が高い環境、すなわち機会コストの高

い社会的環境(山岸, 1998)であるといえる。このような環境において、多くの友人と関係を構築しようとする傾向は、より利得の高い資源を獲得できる可能性を生み、したがって、より適応的な方略となるだろう(山岸, 1998)。

一方、村落では、強いコミットメント関係にある特定の親友との関係維持が実現していることの指標である相手との心理的一体感が、人間関係満足度を高めると予測したが、重回帰式は有意ではなく、この予測は支持されなかった。本研究では親友を1人挙げてもらい、その人物との心理的一体感によって、人間関係満足度を予測した。しかし、村落において狭く深い関係が志向されているとしても、そのような関係が1人の親友に限定されるとは考えにくい。したがって、その人物との関係維持が実現していたとしても、それのみでは人間関係満足度を十分に予測することができなかつたと考えられる。ただし、表4からも読み取れるように、都市と異なり村落では、友人数と人間関係満足度との相関は認められなかった。これは少なくとも、都市において有効な資源獲得方略が、村落では適応方略とはならないことを示唆している。村落における適応方略を明らかにすることは今後の課題であるが、表4の結果、および特定の役割関係にある人物の代替選択肢の少なさという社会的環境の特徴(Fischer, 1982)を考えると、すでに強いコミットメント関係を形成している少数の他者との関係を維持しようとする方略は、資源の獲得をより確実にし、したがって、より適応的な方略となると予測される(山岸, 1998)。

いずれにしても、村落と異なり都市では、それぞれが専門的な資源を提供しているであろう多くの友人たちとの関係が構築できているほど、人間関係満足度が高まるという上述の結果は、居住環境によって異なる適応課題への解決方略が、対人関係の志向性の都鄙差を生み出すことを示唆している。

ところで、本研究において、友人数および親友への心理的一体感に都鄙差は認められなかった(表3参照)。これは、対人関係の志向性の都鄙差に関する先行研究の知見(e.g., 大谷, 1995a, b)と整合しないように思われる。この

ような結果が得られた原因として、以下の2つの可能性が挙げられる。第1に、本研究で用いた友人数と心理的一体感の測度が、都鄙差を検出するのに十分でなかった可能性がある。まず友人数について、都市では、中距離友人数（住居から30分～120分圏内にいる友人の数）が多くなる一方、近隣友人数（住居から徒歩圏内にいる友人の数）は少なくなることが知られている（Fischer, 1982; 松本, 1995）。本研究では、友人数を測定する際に距離の区別を設けなかったため、都鄙差が明確に現れなかったのかもしれない。都市に居住する人が専門的な他者との多くの関係を築こうとするのであれば、友人数の都鄙差は、居住地域から離れた範囲で顕著に現れると考えられる。次に、心理的一体感について、本研究で用いたIOS尺度（Li, 2002）では、強い一体感を示す6と7はほとんど選択されていなかった（それぞれ、5.3%と1.8%）。本研究では同性の親友を対象としていたため、強い一体感を抱いていたとしても、自己と親友がほとんど重なった状態として表現される選択肢は選択されにくかったと考えられる。そして、親友という一定以上の親密性が形成されている関係の中で、得点の選択範囲が狭くなり、心理的一体感の都鄙差が検出されにくくなったと推測される。

第2に、本研究では対人関係の志向性を直接測定したわけではなく、あくまでも、それぞれの志向性に合致する対人関係が実現されているか否かの指標として、友人数と親友への心理的一体感を測定した。しかし、対人関係への特定の志向性を有していなくても、そのような関係が実現する可能性は十分ある。例えば、強いコミットメント関係にある他者との強固な関係を維持するという志向性を持っていなくても、親友と特定の役割関係を長期間共有することで、一体感は自然と強まるかもしれない。また、多くの友人との関係を構築するという志向性を持っていなくても、特定の友人との関係を維持していく中で、その人物の友人とも知り合いになり、その結果、友人数は多くなるかもしれない。したがって、友人数と心理的一体感という測度に、対人関係の志向性による変動が十分に反映されず、それぞれの測度に都鄙差が認めら

れなかった可能性がある。

いずれの解釈も推測の域を出ず、さらなる検討が必要であるが、ここで、友人数と心理的一体感の都鄙差が認められなかったことは、先に述べた人間関係満足度の規定因の都鄙差に関する解釈の妥当性を低下させるものではないことを強調しておく。なぜなら、本研究において、友人数と心理的一体感に都鄙差は認められなかったが、それぞれが人間関係満足度に及ぼす影響は都市と村落で異なっていた。そのため、友人関係を構築・維持する際の心理的背景は都市と村落で異なることが十分に示唆されるからである。

以上の議論から、自己を取り巻く環境に適応しようとする個人の心理過程は、対人関係の様態の都鄙差を生み出す大きな要因となっていると考えられる。その意味で、我々が他者と営む関係を資源獲得のための適応方略と捉えることは、対人関係の様態の都鄙差を検討するうえで有用な視点といえるだろう。ただし本研究では、適応課題の解決の程度を表す指標として、友人数と親友への心理的一体感という友人関係の性質のみを取り上げている。当然のことながら、我々が適応課題を解決するために構築・維持する関係は、友人関係に限定されるわけではない。今後の研究においては、親族関係などの他の関係についても、その様態の都鄙差を本研究と同様の観点から検討する必要があるだろう。

居住地域の都鄙性と拒絶への感受性

適応課題への解決方略に伴って生まれる対人関係の様態の都鄙差は、関係相手と相互作用を行う際の個人の心理過程に影響を及ぼすと考えられる。本研究では、適応課題と密接に関連する関係相手からの拒絶の有無を判断する過程について、その都鄙差を検討した。他者からの拒絶は、相手が提供する資源を喪失することを意味し、個人に様々なネガティブな影響を及ぼす（Baumeister & Leary, 1995）。しかし、それぞれの居住環境における対人関係の様態を考えると、親友という特定の重要他者からの拒絶に伴う損失は都市と村落で異なる。それに伴って、対人コミュニケーション過程において相手からの拒絶の手がかりを敏感に検知する程度に都鄙

差が認められると考えた。そのため、居住地域の都鄙性が、親友との関係の様態に影響し、それに伴って、相手とのコミュニケーション過程における拒絶への感受性に影響を及ぼすという予測を検証した。

その結果、村落と比較して都市に居住する人は、親友と共有する社会的役割の数が少なく、そのため、相手との間に生じる沈黙への否定的な反応が弱いという関係が得られ、予測は支持された。この関係は、特性自尊心と年齢という個人の内的属性、および心理的一体感という関係の親密性の影響を統制しても得られた。「狭く深い」関係が志向される村落と比較して、「広く浅い」関係が志向される都市では、強いコミットメント関係にある特定の親友と共有される社会的役割の数は少ない (e.g., 大谷, 1995a)。そのため、親友が果たす役割を他の人物によって代替できる可能性は高く、親友から提供される資源への依存性は低い (Berscheid & Ammazalorso, 2001)。したがって、親友から拒絶されることに伴う損失はより少なく、拒絶の手がかりを敏感に検知しようとする傾向は弱い (White, 1981)。その結果、会話中の拒絶の手がかりである沈黙への否定的な反応が希薄であると考えられる (e.g., 宮崎, 2006b)。

以上より、対人関係の様態の都鄙差が個人に及ぼす心理的な帰結として、親友とのコミュニケーション過程における拒絶への感受性は、村落と比較して都市においてより低いことが示唆されたといえるだろう。では、親友以外の関係における拒絶への感受性にも同様の都鄙差が認められるのだろうか。本研究では親友に関するデータしか得られていないため、これについて明示的な結論を下すことはできない。しかし、それぞれの環境におけるネットワーク構造を考えると、個人の持つ大部分のネットワーク成員についても、本研究と同様の結果が得られると予測される。

村落において特徴的な高密度のネットワーク (e.g., 針原, 2003) においては、自己の有するネットワークの構成員が親友との関係も構築している可能性が高い。そして、親友との繋がりを有している他者との関係においては、たとえ相手の提供する資源が少ない場合であっても、

その人物との関係が悪化することで、親友から提供される資源も喪失する可能性を有している (e.g., Fiske & Yamamoto, 2005)。一方、都市において特徴的な低密度のネットワーク (e.g., 針原, 2003) では、当事者同士の関係が他の関係から比較的独立している (Fischer, 1982)。そのため、たとえ相手から拒絶されて関係の状態が悪化したとしても、提供される資源の喪失という影響は相手との関係内に留まる可能性が高い。したがって、拒絶に伴う損失の程度によってその感受性が変動するという議論と総合すると、親友以外の関係においても、村落と比較して都市において拒絶への感受性は低いと予測される。ただし、これはあくまでも推測に過ぎず、さらなる実証研究が必要である。

本研究の限界と今後の課題

以上を要約すると、他者が提供する資源の獲得という適応課題への解決方略の相違が、異なる対人関係の様態を生み、それに伴って、強いコミットメント関係にある特定の重要他者とのコミュニケーション中の拒絶への感受性に都鄙差が生じるという過程が本研究から示唆されたといえる。すなわち、都市に居住する人は、専門的な役割を果たす多くの他者との関係を構築することによって適応課題を解決しようとし、そのため、特定の他者が提供する資源への依存性は低い。その結果、相手からの拒絶に伴う損失は少なく、相手との関係を構築・維持するために欠くことのできないコミュニケーション過程において、沈黙という拒絶の手がかりを敏感に検知しようとする傾向は弱いことが示唆された。その意味で本研究は、都市という社会的環境に居住することが個人の心理過程にもたらす影響について、新たな知見を提供するものであったといえる。しかしながら本研究は同時に、以下に示す限界を有している。

第1に、本研究では人間関係満足度の規定因として友人関係の性質のみを取り上げており、そのため、村落における分析では重回帰式は有意でなく、また都市における分析においてもモデルの説明力は弱かった。それぞれの居住環境における適応方略という観点から、他の関係についても同様に、その性質が人間関係満足度に

及ぼす影響を検討する必要がある。第2に、本研究では拒絶への感受性の指標として、親友との間に生じる沈黙への否定的な反応を用いた。しかし、これは間接的な指標であり、そのためパス解析で得られた変数間の関係は弱かった。今後の研究では、拒絶への感受性を直接測定し、両者の関係を検討する必要がある。

第3に、適応課題への解決方略が都市と村落で異なるのであれば、それぞれの居住環境において適応方略の実行を可能にする心理機制が個人に備わっていると考えられる。例えば山岸(1998)は、機会コストが高い社会的環境において、他者一般に対する信頼 (trust) が高いことを示している。関係の初期など相手からの受容が不確実な状況において、他者一般に対する高い信頼を持つことは、利他的な交換関係の形成を促進し、したがって、多くの新規な関係の構築を容易にするだろう (山岸, 1998)。そして、本研究で検討した拒絶への感受性もこのような心理機制の1つであると考えられる。本研究では、特定の他者との関係の様態が拒絶への感受性に及ぼす影響を検討したが、そのような感受性が他の関係にも般化され、それに伴って特定の解決方略の実行が容易になるという回帰的な関係は十分想定できる。

具体的には、関係相手からの拒絶を検知したとき、人は相手との関係の状態を回復するように動機づけられ、拒絶の可能性を最小限にする行動が導かれやすくなる (e.g., Baumeister & Leary, 1995; Leary et al., 1995)。そのため、ある他者との関係において拒絶の手がかりをより敏感に検知するということは、相手との良好な関係の維持を容易にする (宮崎, 2006a)。したがって、村落において拒絶への感受性が高いということは、特定の他者との関係の維持という適応方略の実行を容易にしていると考えられる。一方、拒絶への感受性が低いということは、関係相手から拒絶されるリスクをより低く見積もることを意味し (Downey & Feldman, 1996)、そのため、自己開示 (self-disclosure) などの相手から拒絶される可能性を内包しているが、関係の構築・進展のために欠くことのできない行動 (片山, 1996) はより導かれやすくなるだろう (Sommer, 2001)。したがって、

都市において拒絶への感受性が低いということは、多くの新規な関係の構築という適応方略の実行を容易にしていると考えられる。

以上の議論はいずれも推測の域を出ないが、他者一般に対する拒絶への感受性も都市と村落で異なるのか、異なるのであれば、それは特定の適応方略の実行を誘引しているのかについて検討することは、居住地域の都鄙性と個人の心理過程との関連を明らかにするうえで重要な課題である。

注

1. 本研究は「都市文化創造のための人文科学研究」(21世紀COEプログラム)における研究の一環として行われたものであり、都市文化研究センターの助成を受けた。なお本稿は、第1著者が2005年度に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。また本稿の一部は、第46回日本社会心理学会において発表されている。本稿の執筆にあたり、第1著者が池上知子先生(大阪市立大学大学院文学研究科・教授)よりご指導いただきました。心より感謝いたします。
2. ここでの「浅い-深い」という次元は、他者との関係における親密性の相違を含意するわけではない。あくまでも、他者との関わり方の深さ (i.e., 他者と関わる社会的文脈の多重性) として位置づけている。Wireman (1984) が提示した親密な第二次的関係 (intimate secondary relationships) という概念が表しているように、他者と関わる文脈が限定していても、その中で親密な関係を構築することは可能である。
3. 拒絶への感受性は、相手への依頼場面において、相手からの拒絶的な反応を懸念する程度によって測定した (Downey & Feldman, 1996)。
4. 欠損データが存在するため、以下で分析対象となった人数とは一致しない。
5. 本研究は、他の研究者との共同研究として実施されたため、ここで紹介する調査項目以外にも多数の項目を一緒に含めて調査を実施

している。ここでは、本研究で使用した項目のみを記載した。

6. ただし、1が選択された (i.e., 友人がいない) 場合、親友との関係について尋ねることは不可能であるため、これらの3つの測度には回答してもらわなかった。

引用文献

- Argyle, M. & Henderson, M., 1985, *The anatomy of relationships: And the rules and skills to manage them successfully*. UK: Penguin. (吉森 護(編訳) 1992 人間関係のルールとスキル 北大路書房)
- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D., 1992, Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 596-612.
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R., 1995, The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.
- Berscheid, E. & Ammazalorso, H., 2001, Emotional experience in close relationships. In G. J. O. Fletcher & M. S. Clark (Eds.), *Blackwell handbook of social psychology: Interpersonal process* (pp.308-330). Malden, MA: Blackwell.
- Coopersmith, S., 1967, *The antecedents of self-esteem*. San Francisco, CA: W. H. Freeman.
- Downey, G., & Feldman, S. I., 1996, Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1327-1343.
- Dunbar, R., 1996, *Grooming, gossip and the evolution of language*. London: Faber and Faber.
- Fischer, C. S., 1976, *The urban experience*. New York: Harcourt Brace Jovanovich. (松本康・前田尚子(訳) 1996 都市的体験—都市生活の社会心理学 未来社)
- Fischer, C. S., 1982, *To dwell among friends: Personal networks in town and city*. Chicago, IL: The University of Chicago Press. (松本康・前田尚子(訳) 2002 友人のあいだで暮らす—北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク 未来社)
- Fiske, S. T., & Yamamoto, M., 2005, Coping with rejection: Core social motive across cultures. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel(Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying* (pp. 53-73.). New York: Psychology Press.
- 針原素子, 2003, 個人と地域のネットワークが自己呈示方略に及ぼす影響 日本社会心理学学会第44回大会論文集, 292-293.
- 針原素子・辻 竜平, 2002, 日本人における自己卑下の規定因を探る—都市と村落のネットワーク比較から—日本社会心理学学会第44回大会論文集, 172-173.
- 針原素子・辻 竜平, 2003, ネットワーク構造が自己呈示方略に及ぼす影響について 日本グループ・ダイナミクス学会第52回大会論文集, 24-27.
- 針原素子・辻 竜平, 2005, ネットワークにおける情報伝播と自己卑下の自己呈示 佐藤嘉倫・平松 闊(編著) ネットワーク・ダイナミクス: 社会ネットワークと合理的選択 (pp.27-51) 勁草書房
- Hasegawa, T., & Gudykunst, W. B., 1998, Silence in Japan and the United States. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **29**, 668-684.
- Haselton, M. G., & Buss, D. M., 2000, Error management theory: A new perspective on biases in cross-sex mind reading. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 81-91.
- Jensen, J. V., 1973, Communicative function of silence. *ETC: A Review of General Semantics*, **30**, 249-257.
- 亀田達也・村田光二, 2000, 複雑さに挑む社会心理学: 適応エージェントとしての人間 有斐閣アルマ
- 片山美由紀, 1996, 否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連 心理学研究, **67**,

- 351-358.
- Kelley, H. H., Holmes, J. G., Kerr, N., Reis, H., Rusbult, C. E., & Van Lange, P. A., 2003, *An atlas of interpersonal situations*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Knapp, M. L. & Vangelisti, A. L., 2004, *Interpersonal communication and human relationships (5th Ed.)*. Boston, MA: Allyn and Bacon.
- Leary, M. R. & Baumeister, R. F., 2000, The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna(Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.32, pp. 1-62.). San Diego, CL: Academic Press.
- Leary, M. R., Koch, E. J. & Hechenbleikner, N. R., 2001, Emotional responses to interpersonal rejection. In M. R. Leary(Ed.), *Interpersonal rejection* (pp.145-166). New York: Oxford University Press.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L., 1995, Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- Li, H. Z., 2002, Culture, gender and self-close-other(s) connectedness in Canadian and Chinese samples. *European Journal of Social Psychology*, 32, 93-104.
- Maslow, A., 1943, A theory of human motivation, *Psychological Review*, 50, 370-96.
- 松本 康, 1995, 現代都市の変容とコミュニティ, ネットワーク 松本 康(編著) 増殖するパーソナルネットワーク(pp. 1-90) 勁草書房
- McLaughlin-Volpe, T., Aron, A., Wright, S. C., & Lewandowski, G., W. Jr., 2005, Exclusion of the self by close others and by groups: Implication of the self-expansion model. In D. Abrams, M. A. Hogg, & J. M. Marque(Eds.), *The social psychology of inclusion and exclusion*. (pp. 113-134.). New York: Psychology Press.
- 宮崎弦太, 2004, 会話場面で生じる沈黙の社会的拒絶としての機能 日本社会心理学会第45回大会論文集, 100-101.
- 宮崎弦太, 2006a, 会話相手からの拒絶の予期と沈黙の回避: ソシオメーター理論を適用して 日本社会心理学会第47回大会論文集, 134-135.
- 宮崎弦太, 2006b, 関係の性質と拒絶への感受性—沈黙の捉え方に及ぼす影響— 日本心理学会第70回大会論文集, 271.
- 向井有理子・金児曉嗣・河野由美・渡部美穂子・岸川真理子・堀江尚子・宮崎弦太, 2003, 都市住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴(4) —自尊心と異文化受容— 日本社会心理学会第44回大会論文集, 728-729.
- Murray, S. L., Rose, P., Bellavia, G. M., Holmes, J. G., & Kusche, A. G., 2002, When rejections stings: How self-esteem constrains relationship-enhancement processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 556-573.
- 大谷信介, 1995a, 現代都市住民のパーソナルネットワーク—北米都市理論の日本的解説— ミネルヴァ書房
- 大谷信介, 1995b, 〈都市的状況〉と友人ネットワーク—大都市大学生と地方都市大学生の比較研究 松本 康(編著) 増殖するパーソナルネットワーク (pp.131-173) 勁草書房
- Pickett, C. L., Gardner, W. I., & Knowls, M. L., 2004, Getting a cue: The need to belong and enhanced sensitivity to social cues. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 1095-1107.
- Rosenberg, M., 1965, *Society and adolescent self image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Sommer, K., 2001, Coping with rejection: Ego-defensive strategies, self-esteem, and interpersonal relationships. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection* (pp. 167-188.). New York: Oxford University Press.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H. H., 1959, *The social psychology of groups*. New York: Wiley.
- 渡部美穂子・金児曉嗣, 2004, 都市は人の心と社会を疲弊させるか? 都市文化研究, 3,

97-117.

White, G., 1981, Some correlates of romantic jealousy. *Journal of Personality*, **49**, 129-147.

Wireman, P., 1984, *Urban, Neighborhood, networks, and families: New forms for old values*.
Lexington, MA: Lexington Press.

山岸俊男, 1998, 信頼の構造: こころと社会の
進化ゲーム 東京大学出版会

Urban-rural Differences in the Pattern of Interpersonal Relationships: Analysis of Friendships and a Resource Gaining Strategy.

Genta MIYAZAKI, Satoru KANEKO

This study investigated the psychological antecedents and consequences of urban-rural differences in the pattern of interpersonal relationships. Concerning resource gaining, we assumed that in urban environments it is more adaptive to build friendships with as many people as possible, while in rural environments it is more adaptive to maintain and strengthen relationships with a few intimate friends. A questionnaire survey was conducted among 2,700 people in the Kansai area. Consistent with our assumption, it was found that relationship satisfaction was determined by the number of friends for urban residents, but not for rural residents. In addition, urban residents shared fewer social roles with their close friends than rural residents, which led to less sensitivity to social rejection among urban people. Results suggest that urban-rural differences in the pattern of interpersonal relationships stem from the differences in preferred resource gaining strategies between these two environments.

Keywords : urban-rural differences, pattern of interpersonal relationships, resource gaining strategy, relationship satisfaction, rejection sensitivity